

水野幸男 編

情報化時代の経営科学

朝倉書店 (199 頁)

ORに関する書籍の多くが主に個々の方法論やモデルを説いているのに対して、本書は新しい時代の経営科学 (OR) のあり方や方向性という、かなり広範な領域でかつ実際的な対象について論じている。また、一般の民間企業から政府、地方自治体までを対象として、一貫して情報化と OR の観点から情報システムの進展プロセスや課題、発展性などが整理されている。特に行政に関する内容について包括的に論じた書籍はまだ少なく、本書の特色の一つと言える。

一方で、この種のテーマが幅広い領域をカバーするが故に内容が漠然となり、具体像が見えにくくなりがちなのに対して、本書は現実の世界でまさに今展開されている (されつつある) 事例や課題を取り扱っている点が非常に興味深い。

さらに付録では、実際に OR 手法適用時に利用可能なソフトウェア製品を分野別に 50 ページあまりにわたって取り上げている。現実の課題解決においては、コンピュータパワーを駆使することが常であり、ソフトウェアの役割も極めて重要である。本書では、各ソフトウェアの機能と特徴、関連ソフトウェア、市販の参考図書なども記載されており、実用上たいへん有用な情報である。

以下、簡単に本書の概要を章ごとに紹介する。

第1章では情報化と OR の進展の経緯を解説すると共に、具体的事例を通じて情報化時代の OR のあり方、進め方を論じている。

第2章では企業の経営戦略とコンピュータを利用した情報システムとの関連を解説している。特にここでは、B2B (business to business) および B2C (business to consumer) に重点を置き、動向や今後の発展についても論じている。

第3章は、e-Japan 計画に代表される行政へのアプローチを扱った「eガバメントシステム」についてである。従来、OR的手法は民間企業にのみ適用されると考えられてきたが、昨今は政府や地方自治体に対し

てもサービス産業としての効率化とサービス向上が求められるようになり、G to C (government to citizen), G to B (government to business), G to G (government to government) という領域の情報化による改善・強化が必須となってきた。これらは単なる行政の機械化ではなく、情報化技術と OR を駆使した行政の効率化と、ユーザ (国民、企業) とのインターフェースの電子化が重要なポイントとなる。ここでは eガバメントシステムの一般知識や基盤的技術の解説から、電子入札や電子投票など具体的な取り組みについても紹介されている。

第4章は情報化を貫く原理・原則とそれに対応した新しいビジネス構造についてまとめている。情報化と OR に関連する領域でもこれまで様々な分野から多くの法則が提唱されてきた。本章ではこれらの重要な法則を整理しているだけでなく、諸法則の背景や関連性が解説されている。また新しいビジネス構造の解説においては現実の企業のビジネスモデルを例としており、たいへん興味深い。

本書は以上のように、情報化という時代の流れに対して OR のあり方、進め方を論じたたいへんユニークな良書である。OR の研究者はもちろん、数学や専門的な知識を必要としないように平易に書かれているため、今まで OR と接点のなかった方々にとっても OR 研究の方向性を理解する上で有用な書である。情報化の進展はたいへん速い。体系的にまとまった情報をなるべく速く効率的に入手する上でも本書を一読されることを是非お勧めしたい。

最後に本書の編者である水野幸男氏は 2003 年 1 月に本書の完成をみることなくご逝去されたが、執筆者の方々が協力して同氏の遺志を継いで出版に至った。新たな時代に向けて OR の進むべき方向を示した本書を出版された意義は非常に大きい。末筆ながら心より水野氏のご冥福をお祈りする。 (矢田 健)